

小鹿野歌舞伎の保存・継承

小鹿野町（おがのまち）は埼玉県秩父郡に位置する人口 1 万 2 千人の小さな町である。花と歌舞伎と名水の町といわれ、町の中心部と 5 つの集落（十六・津谷木・奈倉・上飯田・両神小森）の神社の祭りで奉納歌舞伎が演じられている。江戸文化文政期（1804 年～1830 年）以来 200 年以上にわたり、戦争末期を除き、途切れることなく継承されてきた。町内 10 カ所に歌舞伎の常設舞台があり、小鹿野春祭りでは上町・春日町の屋台で歌舞伎が上演される。江戸・明治期にかけてこの地方を拠点に興業をおこなっていた坂東彦五郎（のち大和座）の流れを汲む小鹿野歌舞伎は、生糸の生産によって栄えた秩父地方の人々の豊かな暮らしぶりを伝える郷土芸能として、1975 年に埼玉県無形文化財の指定を受けた。

全国約 220 カ所で地芝居が伝承されているとされるが、他の地域と同様、小鹿野歌舞伎も 1950 年代から 60 年代の高度経済成長期に生活スタイルの変化によって伝承が困難になっていた。祭りで歌舞伎が上演されても観客が集まらない状況が続いたという。しかし、1971 年に開始された小鹿野町郷土芸能大会をきっかけとして、1973 年に小鹿野歌舞伎保存会が発足し、町の文化財指定を受けて継承・発展の道筋が拓かれた。1984 年には両花道を備えた町立小鹿野文化センター（700 席）が開館し、芸能祭をはじめ歌舞伎の練習の場としても活用されている。大正期と戦後初期に演じられていた子ども歌舞伎も 1987 年に再復活した。

1997 年に全国歌舞伎・郷土芸能祭が小鹿野で開催され、小鹿野歌舞伎は全国的に注目されるようになった。集落歌舞伎の役者や子ども歌舞伎の指導者、義太夫・三味線、衣装・鬘、大道具などの担い手約 40 人によって構成されている小鹿野歌舞伎保存会と町の社会教育課がタイアップして、町内と県内外で年間 30 回以上の歌舞伎上演をおこなっており、一度衰退しかけた小鹿野歌舞伎は子ども・若年層も加わって再び活況を取り戻している。

第 45 回小鹿野町歌舞伎・郷土芸能祭の開催

2015 年 11 月 14、15 日の 2 日間、小鹿野文化センターで第 45 回歌舞伎・郷土芸能祭（埼玉県芸術文化祭）が開催された。開会前から小鹿野保育所の子どもたちによる秩父囃子が鳴り響き、子ども歌舞伎、中学生歌舞伎、歌舞伎保存会の上演、獅子舞、神楽、太鼓、昼休みには地区の神楽保存会や囃子会、社会教育歌舞伎伝承教室から誕生した歌舞伎サークルうぶの会の上演など 22 団体が出演した。80 人の役者の登場、40 人の裏方の活躍、場外には町内 12 団体の出店があり、町内外からのべ千人以上の観客が集まる賑わいをみせた。

子ども歌舞伎は 4 歳の子どもから小中学生、卒業生を交えて「恋飛脚大和往来封印切之場（このたよりやまとおうらい ふういんきりのば）」の人情世界を表現し、多くの写真家のフラッシュを浴びた。三田川中学「菅原伝授手習鑑吉田社頭車引之場（すがわらでんじゅてならいかみ よしだやしろくるまびきのば）」、長若中学「絵本太功記十段目尼ヶ崎閑居之場（えほんたいこうき じゅうだんめ あまがさきかんきよのば）」も堂々とした演技で拍手喝さいを浴びた。

指導者の南広さんは、退職後長若中学の校務員となった縁でこの 2 校の総合的学習の時間の歌舞伎指導を引き受け、十数年間継続してとりくんできた。少人数のため 1 年から 3 年まで全員が役者・黒子・三味線・義太夫を担当、郷土芸能祭、学校文化祭や町立病院、高齢者福祉施設でも上演している。2016 年度から現在 4 校ある中学校が 1 校に統合される。2 校の中学校歌舞伎は今回が最後の上演として町民の心に刻まれた。

世代を超えて共に演じ、つながる地域

子ども歌舞伎は大人の上演以上に観客を集め、東京浅草をはじめ、県外に招かれることも多い。小学1年生から中学2年生まで、全町から常時20人ほどの子どもたちが参加して指導を受けており、石川県小松、滋賀県長浜に並ぶ三大曳山子ども歌舞伎と称されている。

長年歌舞伎の役者、三味線・義太夫をつとめている柴崎好一さんが、自宅に屋台囃子を習いに来ていた子どもたちに声をかけて歌舞伎の練習を始め、地元上町子ども会に相談して子ども会芸能部（のち上町子ども歌舞伎）を発足させたことを機に、以後28年間小鹿野子ども歌舞伎の活動が続いている。「地域の芸能を子どもたちに伝えて地域の良さを知ってもらいたい。小さい時にいい思い出があれば、一度出て行った子どもたちも帰ってこようという気持ちになるかもしれない。歌舞伎で大きい子と小さい子の絆が深まり、親たちも一生懸命まもって支えてくれる」との思いから、定年を待たずに退職して子どもたちの指導に情熱を傾けてきた。長男将信さんは子ども歌舞伎の一期生で現在上町若連の役者、お孫さんは今回4歳でデビュー、元美容師の奥さんは着付け担当という歌舞伎一家である。

子どもたち世代につなぐという努力は集落でも意識的におこなわれており、今では保存会の支援を受けながら全地区で子ども歌舞伎の上演、子役の登場がみられる。

4歳の頃から津谷木集落の歌舞伎で子役を演じ、子ども歌舞伎に入って浅草や小松でも上演した経験をもつ小澤早也香さんは、祖父の代から歌舞伎役者という家庭に育った。父親の小澤幸男さんは「ものづくり大学」（埼玉県行田市）の講師もつとめ、大工として多忙な仕事をしながら、歌舞伎保存会の津谷木部会長、役者、大道具担当者として中心的な役割を担っている。早也香さんは幼少期にはひっこみ思案な子どもであったが、歌舞伎を演じる中で自信をつけ、中学校では生徒会長をつとめるほど積極的な性格になったという。中学卒業の頃には「町の方々に支えられてきたので、お世話になった町のために働きたい」と思うようになり、念願を果たして町役場職員となり、現在中央公民館で働いている。

上町の若連で消防団でも活躍している中里貴久さんや山崎陽平さんも、子ども時代から太鼓や歌舞伎に親しんで育った。「歌舞伎は人のつながり、厳しい面もあるけどあたたかくて絆が深い」、「消防をやっているからほとんどの家の方々を知っていて声をかけることができる」、「密度濃いつながりがあるって、やっぱり小鹿野がいいと戻ってくるのが何人かいる」と、人をつなぐ力がある歌舞伎を次世代に伝えたいと頑張っている。

少子化・人口減少の厳しい現実があるからこそ、80代から中堅層、青少年、幼少期の子どもたちが共につながり育ちあう草の根の文化として、歌舞伎を絶やさずに次の世代につないでいきたいという町の人々の思いは深い。

＜写真＞ 第45回歌舞伎・郷土芸能祭 子ども歌舞伎「恋飛脚大和往来封印切之場」（小鹿野町提供）

